雜纂

波斯「エズド」に於ける拜火教の現況

足利惇氏

私は、昭和九年九月より昭和十年六月末日に至る迄、約十ヶ月間、當時の波斯帝國、今日の「イラーン」帝國の首都「テヘラーン」市に居住し、ここを中心として、帝國の領土に於いて、史學上・宗教學・乃至土俗學上、最も著明なる地點を視察することを得た。時恰も、昭和九年秋十月、大叙事詩「シャフナーメ」(王家の歴史)の創作者であり、又近代波斯語の祖と云はるゝ、世界的大詩人「フェルドウシイ」の一千年祭祭典が「テヘラーン」市に擧行せられしに當り、帝國政府は各國の學者を招待し、私も亦、日本政府を代表して、この千載一遇の祭典に參列した。式後、詩人の生地なる「ホラーサーン」州「ツス」(Tus)に於ける皇帝親修の紀念碑除幕式に參列し訖りて、首府「テヘラーン」に還り、殆んど休息する暇もなく、帝國の西方「アゼルバイヂャン」(Azerbaijan)に向つて見學の途に上り、その旅行より首都に還つて後、「イラーン」高原が漸く雨季に近づき、國内の旅行が非常に困難ならむことを憂慮し、雨季に入るに先立ち、急に帝國の南方地域に向ひ、首都を出發した。

此の旅行計劃の動機は、第一に、近代波斯に於ける、「イスラム」文化の最高潮に達した時代、即ち、西暦紀元

一千五百九十一年から一千七百三十六年に亙りて帝國に君臨した「サファヴィ」(Safavi) 王朝の英主、「アバース」(Abbās) 大帝の帝都たりし「イスパハン」(Ispahan) 市に到り、「アバース」大帝の時代から傳承し來りたる美術・工藝・宗教・産業の實際を見ることであつた。第二には、此の舊都を更に南下して、今日の「ファルシスタン」(Farsistan)、卽ち、波剌斯の邦に趣き、古代歴史家の「ペサルガダ」(Pesargada. 古代波斯語 Paiśiyāuvādā)、今日では「ポルヴァール」河 (Pulvar) の岸に近き「モルガーブ」(Murghāb) の地に眠つて居る波斯帝國「アケメニード」王朝 (Achaemenes. 古代波斯語 Haxāmanišiya) の始祖、キュロス (Cyrus. 古代波斯語 Kūru) の英魂を弔ひ、次に、西曆紀元前、第六世紀より第五世紀に亙りて、西は希臘・埃及から、東は印度に至る有史以來の大帝國を建設した同王朝の大英主「ダリウス」一世 (Darius I. 古代波斯語 Dārayavahu; Dārayavau) の都せし「ペルセポリス」(Persepolis)、今日で云ふ「タフテ・ヂャムシッド」(Taxt-i-Jamšīd) の遺墟を尋ね、又同地より程遠からぬ

「ナクシェロスタム」(Naqš-i-Rustam) に「ダリウス」一世以下三代の帝王の墓陵と、薩珊王朝 (Sassanide. 中世波斯語 sāsān) の英主、「シャプール」一世 (Sapor. 中世波斯語 sāhpuhr 王子の義) が當時の羅馬皇帝「ヴァレリアン」(Valerian 西曆紀元二五三—二五九年) を虜にし、彼をして馬前の賤役を掌らしめてゐる彫刻の遺つてゐるのを見た。第三には、更に南行して、「シラーズ」(Sīrāz) の町に向つたが、同地は波斯文學史上、珠玉と謂はれてゐる、「サアディ」(Sa'adī)、「ハーフェズ」(Hāfez) の生れ、又その墳墓の地であるが、流石、「シラーズ」の町は南國氣分豐かで、叙情詩の詩人の出たのに相應しい所であつた。第四には、以上の觀光探風の旅行をなした地點から見れば、廻り路で旅行上の不便が少くないが、中部「イラーン」の「エズド」(Yezd) に向ひ、同地方に今日に於いて、已に絶滅に瀕しつつある「ゾロアスター」教、卽ち「ザラスシュトラ」(Zarathuštra) が建設した、或ひは改革したと云はれてゐる古代「イラーン」民族の宗教の規定した風習制度が、今尙ほ存在してゐるのを見たのであ

る。

昭和九年十一月六日、早朝、「テヘラーン」を出發して、南方に向ひ、「コム」(Qum)の町に入つた。第八の「イマム」(Imam)なる「イマム・レザ」(Imam Reza)の妹なる「ファテマ」(Fatema)を祭る金色の回教寺院(モスヂット)があり、波斯の回教徒の聖地で、かの「イマム・レザ」を祭る「ホラーサーン」の「メシェッド」と共に常に巡禮者が集る處である。「コム」を過ぎ、「カーシャン」(Kāšān)に至る。同地は古い町で、花模樣の美しい絨緞、香氣芬郁たる薔薇水(ゴラーブ)(gulab)、及び波斯陶器を產出する靜かな町である。「イスパハン」に入る。町は古人の「アスパダーナ」(Aspadāna)と云ふ「馬の繫泊所」の意味を持つが、一見古い文化を底深く潜めてゐることを感ぜしめた。晩秋とは云へ綠未だ落ちざる並樹、王立の寺院(メスヂッド・イシャー)(mesjid-i-Šah)を始め諸々の大寺院の擬寶珠形の圓屋根、高い尖塔(ミナレット)等各所に聳え、青空に澄み渡る秋陽の光に照り輝く樣は、流石に宗教の都であることを頷せた。此の町の見學は、旅行の都合上歸途に讓つて、一泊の後、「イスパハン」より途を左に取り、東に向つた。「イスパハン」より百五十粁(邦里三十七里)を距て、「ナイン」(Nain)の小邑がある。「ナイン」に到着する以前、約三十粁の所からの山野の風景は、中部「イラーン」高臺の荒漠無邊なる樣を呈し、山色地相の美しきこと言語を絕する程で、人をして漸く「神都エズド」に近づきし感を起さしめた。「ナイン」の小邑から「エズド」の町は二百粁(邦里五十里)の距離に在る。其の途中には「アクダ」(Aqda)「アルヂャナン」(Arjanan)の小村落があるのみで、其の外は全く無人の境で、又喬木灌木何れもなく、車は唯坦々たる沙漠を疾走するのみである。霜を置いたやうな鹽を吹出した沙上の彼方に、遙かに見ゆる「エズド」の山は、蜃氣樓なす雲層の海に浮び出で、夕陽に映り添うてゐるが、少しも山容が變化しない。無人の境、靜肅の域に在つて、此の奇異なる自然の光景を目擊した者は、一種の靈感に打たれざるを得ない次第である。夕方、午後五時頃、漸く「エズド」の町に入り、旅館とは名のみの驛舍に宿つた。

「エズド」の町は人口四五萬もあり、中部「イラーン」で

は先づ相當な町である。工業地としては絹の産地で有名である。又交通の要地になつてゐる。卽ち、北方「テヘラーン」又は、西方「ハマダン」から東方に向ひ、「ケルマン」を經て、「バンデル・アバース」に赴く隊商、乃至は「バルチスタン」又は印度に向ふ隊商は必ず此の地を通過することになつて居り、又、南方「シラーズ」方面から東北「ホラーサーン」地方「メシェッド」に赴かんとする巡禮者は、必ず此の地を通過せねばならぬ。隨つて駱駝に乘つて「イラーン」の曠野を旅する隊商は、中部波斯に來て、巍然として天空に聳ゆる「エズド」の峯々を望んで、是を目標とし、神靈の棲遲する地と思つたのは尤もの事である。恰も古代印度に於いて、西方又は南方から「ソーン」河の流や、尼連禪河の流域などを經由して、當時、北方印度の帝都であつた「パータリプトラ」(Pāṭaliputra)卽ち華氏城に赴く隊商などは、伽耶地方の象頭山(ガヤシールシャ)や、標高一千四百六十二尺を有する王舍城一帶の山を仰いで一種の神祕感を起したのと同じことである。

私の宿泊した宿屋の世話人は「アルメニア」人で、以前は露西亞の「ソヂィエット」政府の建てた共産黨大學の學生であつたが、波斯政府に捕はれて、此の「エズド」の地に流謫せられた者で、佛蘭西語が、可成り流暢に話せるので、此の人に「エズド」の町の案内を賴むことにした。

「エズド」の氣候は、夏は非常に暑くて冬は非常に寒い。夏の暑を凌ぐ爲めに、此の町の家々の屋上には、望樓のやうな通風塔が林立して居る。この光景は波斯の他所に見えない。住民の多數は「イスラム」教徒であることは勿論であるが、町の東南の方角に當り、丁度、此の町から「ケルマン」の町に通ずる街道がある。此の途の北方に、一廓を形成して居る部落がある。其の部落には大約五千許りの住民が居るが、これこそ、卽ち世界最古の宗教の一で、今もなほ、印度や、波斯や、中央亞細亞、乃至支那等に遺跡が殘つて居る「ゾロアスター」教徒の一團である。今日、全地球上に於いて、拜火教徒と云へば、先づ、印度の「ボムベイ」市を中心とする西方印度の十萬ばかりの「パルシィ」族(Parsi)と、波斯では、この「エズド」の町の五千ばかりの住民と、「ケルマン」の町の四

千ばかりの住民が、その教徒の重要な團體である。波斯の他の地方、例へば、「テヘラーン」「シラーズ」等の處々に拜火教徒の團體が、ちらほら居るには居るが、極めて微弱で、しかも、この「エズド」の町に於けるが如く、一廓をなしては居らぬ。私は、此の廓内に居る教徒が保存し護持してゐる古き習慣風俗、即ち「神代(カン)ながらの道」を親しく目で睹、耳で聽きたいと思つて苦心したが、恰もよし、「テヘラーン」に於いて、波斯の友人から、此の町に、拜火教徒の子弟のみを教育する學校があることを聽いて居たので、この學校を參觀することにした。この學校は印度の「ボムベイ」市に居住する拜火教徒の富豪が、莫大な金額を寄附して、最近に建設したもので、一見した處、甚だ外形の整つた建築と、充分なる内部の設備とがあつて、一般普通教育の外に、鍛冶とか、大工とか云ふ樣な職業教育、即ち Vocational education を、拜火教徒の子弟に授けてゐる。此處の學校の校長の懇切な紹介で、「エズド」拜火教徒中、第一の富豪「アルバブ、ロスタン」氏 (Arbab Rustam) の家に赴き、非常に盛大なる歡迎を受けた。この富豪自らの案内で、拜火教徒の殿堂の内部を見ることが出來た。一體、印度の「ボムベイ」市地方に居住する拜火教徒は、印度教徒に對する敵愾心からでもあらうが、甚だ嚴重に宗教の祕密を恪守して、其の禮拜の殿堂には決して、異教徒を入れない。しかし、此の「エズド」の教徒は少しも私に對しては何らの猜忌心もなく、私の問ふまゝに種々説明をして呉れた。

「エズド」の拜火教徒が、日常相互の間に使用する言語は、一般の町人の使用する言語とは、稍〻趣を異にして居つて、「イスラム」教徒の使用する言語を「ガブリー」(Gabri) 語と稱して居るが、拜火教徒自身は「ダーリー」(Dari) 語と稱して居て、決して「ガブリー」とは云はない。「ガブリー」とは、亞剌比亞語「ghebr」から來た語で、異教徒の言葉、邪教徒の言葉を意味する故に、拜火教自身が、自身の言葉を稱するのに、「ガブリー」と云はぬは當然の事である。然らば、拜火教自らが、「ダーリー」と云ふのは如何なる意味であるかと云ふと、これは「門」又は「戸」を意味する波斯語の「dar」即ち、梵語の

dvār 英語の Door 獨乙語の Tür と同じく、アーリアン語系の言葉であつて、直譯すれば「門の言葉」であるが、其の所謂門戸は決して普通人の家屋の門戸を云ふのではなく、帝王の宮殿の門戸を指すのであつて、帝王を尊敬する上から、門戸の語を假りて、帝王を指斥したのである。T度我が國語で「御門」の語に相當する。クセノフォン (Xenophon) のアナバシス (Anabasis) 第一卷第九章に

πάντες γὰρ οἱ τῶν ἀρίστων περσῶν παῖδες ἐπὶ ταῖς βασιλέως θύραις παιδεύονται.

(最も貴顯なる波斯人の凡ての子弟は王の宮廷にて教育せらる。)

この宮廷の語は戸、門の意味なる希臘語の θύρα の複數を以て現はしてゐる。是は波斯式の稱呼を傚つたものである。又、オットマン土耳古皇帝の宮殿の門戸を飜譯して、英語で「Sublime Porte」獨乙語で「Hohe Pforte」と云つて、是によつて「サルタン」の宮廷、又は「サルタン」自身を指示したのと同じことである。されば「ダーリー」語とは「御門の語」と云ふに當り、英語に譯すれば「Court language」獨乙語なら「Hofsprache」に當り、漢字に譯せば、雅言とでも云ふ可きであらう。

私が最初に「エズド」の町で見た拜火教の寺院は約十米四方の四角な建築物で、石と煉瓦で造つたものであつた。其の中央の天井は圓蓋になつて居り、其の圓蓋の上部は打拔かれて、仰いで天空を見ることが出來る。神火の常に燃えてゐる所は、建物の東北隅にある一室内にあつて、格子のやうな板で圍んである。教徒は格子を隔てて、神火を拜することになつて居り、その格子の裏には、更に板が張つてあるから、外側から神火を見ることは出來ぬ。この格子の室に出入して、神火を守る資格を有するものを、「モーベッド」(Mobed 卽ち、magupati の意味) と云つて、純白の衣服をつけ、純白の布で口を覆うてゐる。これは、自己の呼吸が、神火を汚さんことを恐れるからである。神火を護持するには「エズド」では羊の糞を燃やすとのことであるが、印度の孟買では栴檀の香木を使用してゐた。さればにや、私は孟買に滯在の時

世界に有名な「沈默の塔」(Tower of Silence) を市の郊外「マラバーヒル」の丘上に觀た時、栴檀の香煙が、芬郁として、私が境内に入ると同時に聽くことが出來た。

第二に、參拜した「エズド」の拜火教の殿堂は、第一に參拜した殿堂より一層廣敞であつて、殿堂は丁字型になつて居た。矢張、神火を祀る室は格子のやうな板が張つてあつて、格子の前に、低い緣が突出して、其の上に、中世波斯語、卽ち、「パフラヴィ」語の經典が散亂して居た。參詣人は一人も居なかつたが、こゝを出でんとした時、三人の婦人が參詣するのに遇うたが、此の地方の拜火教の婦人は、他の波斯回教徒の婦人のやうに、「チャードール」を被らず、特殊の風俗をして居り、その衣服の色は、赤味勝の紫で、牡丹色を基調として居り、顏の形も丸味のある形で、「テヘラーン」などでは、決して見ることの出來ない顏形であつた。

以上は、拜火の殿堂に於ける拜火教徒の祭官「モーベッド」の住持する神火の禮拜の狀況であるが、家庭に於いては、教徒は日に三回、一種の火鉢に炭火を起してこれに檜の樹脂を焚いて、「アフラマヅダ」(Ahuramazda) の大神を祀るのである。印度に於ける「パルシィ」教徒の家庭には、それぞれ、一定の器具を用ひ、富裕なる教徒の家では、其の祭器を銀で造つて居るのもある。「ローバン」と稱する松脂の一種の香料と、栴檀の香木とも併せ焚いて、「アフラマヅダ」の大神を祀るのである。

次に、我が國の上代に於ける加冠元服などの儀禮に相當し、又「インド・アーリア」民族の間に、上代より今日に至る迄、守持して居る聖索 (yajñopavīta) 佩帶の式典に相當するコスチー (Kusti)、サドラー (Sadra) 佩帶の制度が、拜火教徒にとつて、非常に重要なる意義を有するもので、教徒の子弟が、七歲と十五歲との間に、必ず祭官「モーベッド」から、一定の儀式を以て、「コスチー」と云ふ紐と、「サドラー」と云ふ白布の肌着とを受けて、これを佩用せねばならぬ。「コスチー」は七十二本の糸で出來て居り、細い羊毛を編んだ紐である。この紐に、前に二つ、後に二つの結目を作つて、身體に卷き付け、三匝に及ぶ。この三匝に及ぶ迄、身に卷き付ける意味は、教

徒の說明によると、拜火教に於ける身口意の三業の制約（梵語ならば、manasā, vacasā, karmaṇā）を象徵するとの事である。卽ち、善意（Humata）・善言（Hūxta）・善行（Huvarišta）を守る爲めであると云つて居る。其の本來の意義は、「インド・アーリア」の聖索、又は聖紐と同樣、倫理學上から見る可きものではなく、寧ろ、政治學上、宗教學上から見る可きものである。殊に、「サドラー」著用の如きは、印度の叙事詩「マハーブハーラタ」に現はれた「カルナ」（karṇa）が、帝釋天より授けられた不死の鎧などの傳說と同樣に視る可きものであると私は信ずる。「コスチー」の糸の數が何故に七十二本であるかにつき、拜火教徒に尋ねたが、何人も滿足なる答をなす者はなかつた。然し、これは非常に興味ある數で、私もこれにつき、多少の意見を抱いて居るが、その發表は他日に期することにする。

拜火教徒は「イスラム」教徒と異つて、今日では、嚴格に一夫一婦の制を守つて居るが、「アヴェスタ」聖典の「ヤスナ」（yasna）第十二卷等に「Xʸaētvadaθa」の制を勸奬してゐる。

āstuyē daēnąm mazdayasnīm fraspāyaoxδrąm
nizāsnaiθīšəm xʸaētvadaθąm ašaonīm . . . .

「Xʸaētvadaθa」とは、「Xʸaētu」と「vadaθa」との二語より成り、前者は梵語の「sva」と同一語なる「Xʸa」（又はhva）に形容接尾語を附けて、「自己に屬する小人數の家族」、又は「高貴」を意味し、「vadaθa」は語根 vad（導く、又は結婚する）より來り、梵語「vadhū」（妻）と關聯する字で、英語の「wed」又は「wedding」等の wed と同一語根から來たものであり、卽ち結婚を意味する。故に全體の字義は、近親を娶ることであつて、長幼尊卑の順序に關係なく、極端なる endogamy である。拜火教の經典はこれを勸奬して居るのみならず、拜火教徒は古代に於いても、これを實行したものと見える。現に歷史に於いても「アケメニード」王朝の時代に「キュロス」大帝の女、「アトッサ」は、その兄弟である「カムビセス」や「スメルヂス」と結婚し、又親族の「ダリウス」一世とも結婚して居ることを以てしても知ることが出來、又、「アルタクセルセ

ス」二世は自分の女「アトッサ」を娶つて皇后として居る。しかし、かゝる極端なる endogamy は、必しも古代拜火教徒の間に限つた譯ではなく、埃及や、希臘や、猶太や印度などの古代に於いて、神聖國家の統治者が、自己の種族の純潔を保持せんが爲めに、往々なした事であつて、これをなすには、種々の理由も必要もあつたことゝ思はれる。唯法律の明文にて、これを勸奬した宗教は拜火教のみであるから、世の學者の注意を惹く次第で、「ヤスナ」の此の文句は、夙に印度の佛教徒の注意を呼起したと見え、阿毘達磨俱舍論分別業品第四の邪淫加行の個所に

從レ癡生者、如丁波剌私讃丙於三母等二行乙非梵行甲。（以上玄奘譯）

天親菩薩卽ち世親菩薩はこの Xvaêtvadaθa の制度を癡より生じた欲の中に入れてゐる。魏書一百二、列傳第九十の西域の波斯國の條に、

俗事火神天神。文字與胡書異。多以姉妹爲妻妾。自餘婚合亦不擇尊卑。諸夷之中最爲醜穢矣。百姓女年十歲以上有姿貌者王收養之。有功勳人卽以分賜。死者多弃屍於山。

又、玄奘三藏の大唐西域記第十一卷、波剌斯國の下に、

婚姻雜亂、死多棄屍。

とあるが、これらに據ると、西曆紀元第六七世紀には、波斯は未だ亞剌比亞人の爲に征服せられず、「ザラスシュトラ」が「アフラマヅダ」の大神の名に於いて、「イラーン」語族の民衆に呼びかけた法律命令は、尙ほ、嚴重に遵奉せられて居たことが明白である。

玄奘三藏が大唐西域記に於いて、拜火教徒の屍體處分の方法を評して、「棄つ」と云つて居るが、成る程、唐代の支那人であつた玄奘から見たら、「棄つ」と云ふより言ひ方がない。元來、拜火教徒は、五大の中、地水火は非常に淸淨なものであると信じて居るから、これを冒瀆せぬ爲め屍體を風葬にするのである。卽ち、風に吹かるるに委すのである。委棄するのではない。この風葬の場所は、ドフマ（Daxma）と云つて、「エズド」の町から、遙か北に當る山に一個所、又南に當り、町から五粁の岩

山に二箇所ある。私はこの後者を參觀した。「アヴェスタ」經典には、「ドフマ」を以て惡魔を拂ふ方法であると論じてゐる。例へばヴィデーヴダート　第七章第二十五の如きは是である。

manayən bā spitama zaraθuštra aēte yōi daēva aētaēšva daxmaēšva gabhēšti spāce vaēpəsti yaθa aētahmi aβhvō yat astvaišti yūzəm yōi mašyāka xᵛarəθa xᵛāsta huyāreš gaṃca xᵛāstəm xᵛaraiti nauiti hā aēte yōi mašyāka xᵛarəšti framanyete.

「ドフマ」は梵語語格の「ドハム」又は「ドフマー」(dham; dhmā) と、その語源を一にして、卽ち「吹く」「吹き拂ふ」の意味を有する言葉で、決して普通學者の臆測する如く、梵語語根の「ダフ」(dah)(燒く意味) と同一の語根から出來た言葉ではないと思ふ。

私が「エズド」で見た二個の「ドフマ」は各〻別れて岩山の頂きに建ててあつて、建築の外觀は圓く、向つて右が男の屍體を容るゝ「ドフマ」で、左は女の屍體を容る「ドフマ」である。左の方は、最近に屍體を置いたものと見えて、禿鷹の一種、卽ち梵語で云ふ「グリドフラ」

(gṛdhra)、英語で云ふ vulture が盛んにその上空を飛翔して居た。岩山の麓から、頂の「ドフマ」に到るには、一條の道路が修築されてあつて、麓には粗末な土煉瓦の屋舍がある。葬送の時は、屍體に附添ふ親族緣者が此の屋舍の中で、屍體に對し最後の訣別をなし、拜火教の祭司が最後の儀式を擧行する。

又、この屋舍の中には常に四五人の特別の人間が住居して居て、彼等は決して「エズド」の人々とは緣組をしない。彼等は私を案內して吳れた人々に向ひ、「大分寒くなつたから、今度來る時には、着物を持つて來てくれ」と云つて居た。此等特種の人々と云ふのは、拜火教徒の屍體處分に關係する事務を擔當する人々であつて、「アヴェスタ」經典の所謂「Nasu-kaša」である。屍體を死者の家から「ドフマ」まで運搬する人々は「Xāndya」と云ひ、屍體を「ドフマ」へ入れる人々を「Nasaṣālar」と云ふ。此等特種の人々が、常住する屋舍を限りとして、屍體葬送の親族緣者と屍體との關係は斷絕するのである。私はその屋舍から山上の「ドフマ」まで上り、「ドフマ」の鐵門迄

行つたが、一種凄慘の氣が肌膚を襲ひ、附近の岩石には白い鳥糞が堆積して、荒涼の光景は、到底、長時間山上に留ることを許さず、下山したから、「ドフマ」の建物の內部を見ることが出來なかつた。しかし、「イラーン」高原の特色として、空氣は雨期以外は乾燥し切つて、山に樹木なく、山と云ふ山は、岩石のみであるから、屍體の風葬は、むしろ、此の國土の氣候に相應した習慣であつて、決して不自然ではない。山野に曝された屍體は、死者生前の業により、僅か二三時間に禿鷹に喰盡さるゝこともあり、また數日に亙つても消滅しないこともあるさうで、惡業の重いもの程、消滅する時間を要すると「エズド」の拜火教徒は云つて居る所から考へると、拜火教徒は今日では、屍體は早く、鷲鳥の腹中に葬り去ることは、死者の親族緣者の本懷であると云ふ考へらしい。隨つて風葬と云ふ考へは失つて居る樣で、「ドフマ」とは屍體を禿鷹に食はしむる所位に、思つて居るのであらう。

なほ、波斯國中、「ドフマ」は「エズド」の外に、「ケルマン」にもあり、又、「テヘラーン」の郊外にある「レイ」(古の Rege. 史記大宛傳中に所謂黎軒の廢墟)の東に當る山の中にもあるが、この方は現在、政府の命令で其の使用を禁止してゐる。「エズド」の「ドフマ」を見て、端なくも思ひ出すのは、玄奘三藏の大唐西域記第九に於ける摩伽陀國王舍城姞栗陀羅矩吒の山の記事である。姞栗陀羅矩吒とは卽ち、「gṛdhra-kūṭa」で「屍體を食ふ鷲の峯」と云ふ梵語で、前述の禿鷹又は禿頭の鷲の棲んで居る峯である。玄奘三藏は此の峯のことを叙して、

接北山之陽、孤標特起、旣棲鷲鳥、又類高臺、空翠相映、濃淡分色、如來御世、垂五十年、多居此山、廣說妙法、頻毘沙羅王、爲聞法故、與廢人徒、自山麓至峯岑、跨谷凌巖、編石爲階、廣十餘步、長五六里、中路有二小窣堵波、一謂下乘、卽王至此、徒行以進、一謂退凡、卽簡凡人、不令同往、其山頂則東西長南北狹、臨崖西陲、有瓠精舍、高廣奇製、東闢其戶、如來在昔多居說法。

とある。此の記事の文中、若し頻毘沙羅王云々と云ふ文句の代りに、王舍城內の人死せば屍體を山頂に運搬せん

が爲め云々と改めたら、容易に「エズド」の「ドフマ」の記事と見ることが出來る。「エズド」の「ドフマ」に到るには、私の休息した山麓の煉瓦製の屋舍は、卽ち、下乘窣堵波と退凡窣堵波とに相當するものであり、山頂の煉瓦製の精舍は、正に「ドフマ」に相當する。玄奘の見た精舍は恐らく、普通佛教徒の住する精舍ではなかつたらしく、廣く、高く、且つ一風變つた建築で、戸が闢いて居たのは、正しく屍體を禿鷹に貪食さす爲めの設備を云つたものと思はれる。しかし、私はこの記事に據つて、直ちに摩伽陀國王舍城の鷲峯、卽ち「グリドフラクータ」の頂には、拜火教徒の「ドフマ」があつたと主張せんとするものでない。しかし、此の地方の地理又は傳說について、佛典に現はれたものを讀み、佛教以外の印度宗教文學に見えたる此の地方の地理又は傳說とを比較して、多年人知れず、疑念を懷抱して居るものである。

先づ第一に　摩伽陀國（Magadha）と云ふ地名であるが、昔から支那で種々の解釋を致し、或は無毒害、或は致甘露處などと飜譯して居る。しかし、これ等は俗解で毫も正鵠を得たとは思はれない。一番合理的の解釋は、「摩伽の地」と云ふにあると思ふ。摩伽とは maga で卽ち拜火教の司教を指示した名稱である。元來この地方は昔時「キータカ」（Kîtaka）と稱する民族の棲息した邦域で、印度「アーリア」の文化が、あまり光被しなかつた地方であつて、如何なる時代に此の地方を「マガ」の地と呼ぶに至つたかは、判明しないが、「クリシュナ」と云ふ半神半人の勇者が、「マガ」外部から印度に招致した傳說は、「プラーナ」文學にも見えてあり、拜火教の司教と云はれた階級が、この地方に來たことも想像せられる。

第二に、鷲峯の所在は王舍城（Râjag-ha）と佛教經典には見えて居るが、如何なる理由に存するや知らざるも、佛教經典以外の文學、殊に叙事詩「マハーブハーラタ」等に此地のことを歌うて居るのに、「王舍城（ラージャグリハ）」とは云はずして、單に「ラージャギリ」（王山）と云うて居る。今日でも土人は「ラージュギル」と云つて居り、現に英國政府の印度の測量地圖の上にも Rajgir と書いて居る。「グリハ」卽ち舍に相當する音がない。摩伽陀王の居城であ

つたなら王舍城と云つても差支へないが、普通、印度の文學に何故單に王山と呼んだか判然せぬ。

第三には、こゝには人の屍體を貪食する禿鷹が棲息して居るから、鷲峯と譯し、鷲山と飜するのには、何等の支障がないが、何故か、支那の新舊譯家は「靈」の字を附加して靈鷲山と云ひ、又は靈山と云つてゐる。我が國にも、古來此の譯名を地名に用ひた例が少くない。現に京都東山に、高臺寺と云ふがあり、其の上に靈山と云つて、眞宗興正寺派の廟がある。此等は大唐西域記の記事からとつたことが明白である。これは察する所、死人又は屍體に關係があるから、「靈」の字を、鷲山の字の上に附加したものと思はれる。靈柩と云ひ、靈牌と云ひ、靈丘と云ひ、靈臺と云ひ、或は靈床と云ふが如きものである。梵語で pitryana と云へば、屍體を燒き、又埋むる墓地であるが、義淨三藏などは、これを靈床と譯して居る。故に靈鷲山の靈は、鷲の形容詞とも見られるが、又山の形容詞とも見ることが出來る。

次に、私が見學した「エズド」の町の地名の起源に就いて述べたいと思ふ。この「エズド」(Yazd) の名は「アヴェスタ」語の「Yazata」から來た言葉である。中世波斯語「Yazd」、近代波斯語「izad」と同一根源であつて、梵語のJ音は、イラーン語の Z 音に該當するから、梵語では「yajata」である。其の語根は「yaj-」又は「ij-」であることは云ふ迄もない。「ヤザタ」又は「ヤジャタ」は、古代波斯の文學でも、古代印度のアーリアン文學でも、「崇敬せらる可き」、又は、「禮拜」從つて「祀らる可き」と云ふ形容詞から、神靈、神祇の意味に轉じてゐる。中世波斯語の「yazd」近代波斯語の「izad」は「神」の意味である。魏書一百二、列傳第九十の西域の條に、

國人號王、曰醫囋。

とあるが、この醫囋の「醫」は「ya」又は「i」に比し、「囋」は「zd」又は「zad」に當てて寫音したものと考へることが出來る。卽ち「yazd」又は「izad」で、中世波斯の終りに近い魏書製作の當時、波斯語では、この語を帝王の尊稱に用ひて居たことが判然する。中世波斯、卽ち薩珊王朝の帝王の中には、

yazdgird I (399—430 A. D). yazdgird II (438—457 A. D.). yazdgird III (632—651 A. D.).

の名が見えてゐるが、それらの名は、「神によりて作られたるもの」(yazata+karta) を意味する。この中、「ヤズドギルド」三世のことを唐書では伊嗣侯と音譯してゐるから、實際の發音は「イズド」又は「イーズド」であつたと思はれる。隨つて「エズド」の由は、靈山と譯するもよし、神山と譯するもよし、又地名であるから祇山と譯するもよい。

轉じて、摩伽陀國王舍城靈鷲山の名稱の起源に想到すると、今日の南部ベハール (Pehar) 地方、昔時の摩伽陀帝國の領土には、甚だ拜火教に似た宗教の教徒の居つたと云ふことは到底否定出來ない。佛在世の時代に、王舍城に近き地方、伽耶の地に三迦葉が居つて、此等は事火外道であつた。中にも、優樓頻螺迦葉は、佛成道の地に近き「ウルビンラ」の村に於いて火神に事へ、頑强に佛の教化を受けることを拒んだが、教化せられてから一切の祭器を最寄の河、卽ち、尼連禪河に投じて、其の決心

を示し、那提迦葉、伽耶迦葉等も其の例に從つた。由來、迦葉族の人々、三迦葉と云ひ大迦葉と云ひ、佛教の興隆と護持とに活躍したことは、佛教の歷史上、有名な事實で、其の族名「カーシャパ」(Kāçyapa) の語根について、種々解釋もあるが、「カーシュ」(Kāç) (光る) の語根と「パー」(pā) (護る) の語根とから出來たことが疑なく、つまり、拜火教の「モーベッド」と同じく、神火の護持が此の族の世襲の職であつたことは明白である。佛成道の當時、最初に佛に歸依した二人の優婆塞は「Ukkala」今の「オリッサ」地方出身の隊商の長であつたとも云ひ、又今の「Balkh」昔の「Tahlikh」地方の隊商の長であつたとも云ふが、「バルクフ」は昔から希臘羅馬の地理學者のバクトリアの首都で、「バクトリア」は始めて拜火經典の成立した地方と云ふことになつて居る。而して、「バルクフ」は、昔から小王舍城と云ふ名を以て呼ばれてゐるのは注意す可きことである。

最後に、この拜火教の起源地について、私の今日抱いて居る意見を云へば、「イラーン」西北方の「アゼルバイ

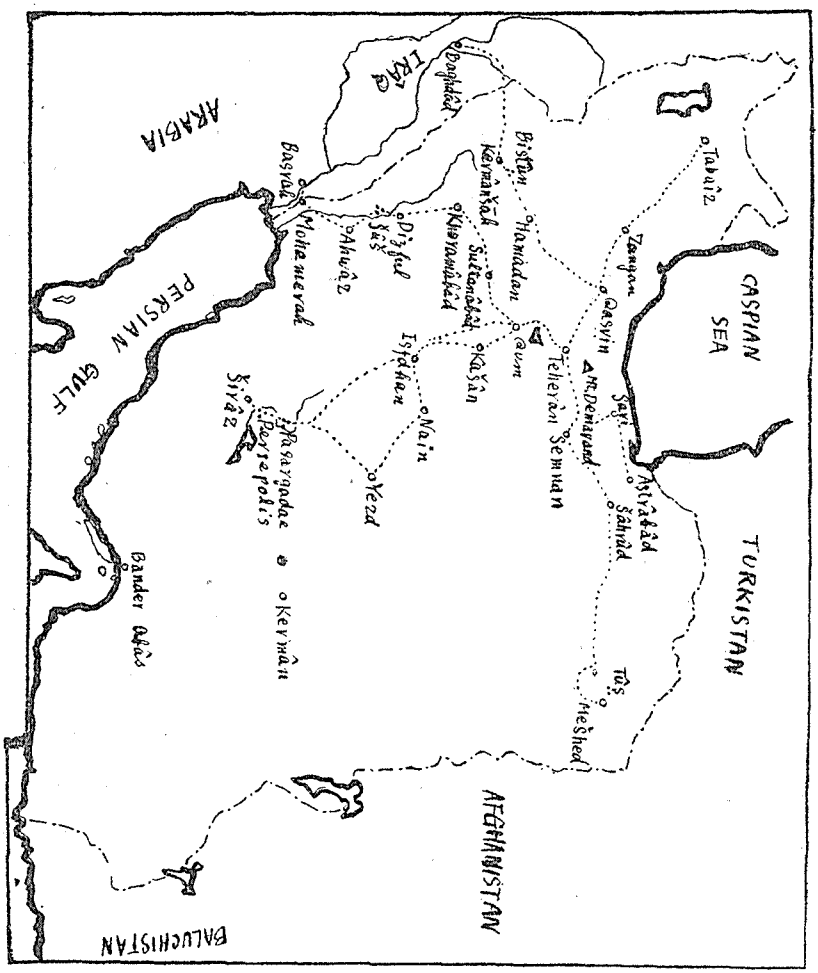
ジャン」（Azerbaijan）であつたと思ふ。成る程、拜火教が「イラーン」高原の民族の間に流布し、經典も編纂せられ、確固たる教團が成立した所は、「イラーン」の東北部で、「バクトリア」地方であつたことは、「アヴェスタ」の中に現はれて居る地名の地位から考へて首肯出來るが、其の宗教の發生地は、此等の地方ではなく、反つて北西部、古代メヂヤ帝國の北部であつて、希臘羅馬の地理學者が、「アトロパテース」州と云つた地方で、今日では此の地方を「アゼルバイジャン」と云つてゐる地方である。同地は、拜火教の起元地としては、非常に相應した地方で、山嶽重疊し、湖水も點在し、中にもウルミア湖（最近レザイエ湖と改稱す。レザは現波斯皇帝の御名である。）は著名で、雨量も相當にあり、從つて地味豐饒で、噴火山も隨所にあり、金銀銅鐵の產出も昔より絕えたことなく、今日では「イラーン」帝國の一部ではあるが、獨立國として儼然立つて行くことの出來る地方である。上古に於いて、波斯は常に羅馬帝國とこの地を爭つて絕えなかつたことは、歷史の示す所で人の知る所である。私は拜火教の起源を山嶽崇拜に歸せんとするものであるから、「イラーン」、高原の中、此の地方が、一番かゝる宗教の發生に適したものと考へる次第である。「アゼルバイジャン」と云ふ名稱は、歷山大帝の波斯征服の時、當時の此の地方の方伯「サトラップ」であつた「アトロパテース」（Atropates）の名から出來たと云ふけれども、第一、當時かゝる人名が果して此の地方に居つたか否かは確證がなく、第二には、中世波斯語卽ち「パフラヰ」語（Pahlavī）で此の地方を「Aturpātakān」と云ふ點から推して、「アトロパテース」の名とは非常に相違して居り、第三には、この「パフラヰ」語の意味が、此の地方の自然の光景を傳へて居るやうに思ふ。

卽ち、地名の前節「ātur」は「アヴェスタ」語の「ātaŭš」、梵語の「athar」、現代波斯語の「ateš」であつて、何れも「火」と云ふ言葉であり、後節の「pātakān」は更に「pāta」と「kān」とより成り、「パータ」は「護られたる」の義で、語根「pā」（護る）の過去受動分詞で、「カーン」は「土」の義であるから、「アゼルバイジャン」とは「火によりて護られ

たる國土」と云ふことになる。「アゼルバイジャン」の北部は露領になつて居り、石油の産地で有名であり、「バクー」はその中心地である。波斯領の部分にも石油を埋藏して居ることは事實で、その「ガンザカ」(Ganzaka)地方には薩珊王朝時代に一大殿堂があつて、神火を祀つて居た。又、「アゼルバイジャン」ではないが、やはり波斯國内で、西南部州の「フジスタン」(Khujistan)にも一大油田があり、その地の今日で云ふ「Mesjid-i-Suleiman」には薩珊王朝時代に拜火教の大殿堂があつた。

西暦紀元第七世紀の中葉から、薩珊王朝の末葉、波斯は大食の蠶食する所となり、漸次、拜火教の勢力を失墜したが、第八世紀頃迄は「イスバハン」の西方、十五粁の地にある「アーテシュ・クフ」(Ateš-kuh)(火の山)には拜火教徒が盛に居住して、茲に一大殿堂があつた。「イスラム」教徒は、その邊を「ガブルアーバード」(gabr-ābād)(異教徒の町)と呼んで居た。印度の拜火教徒は、當時「イスラム」教徒の爲めに追はれ、一時波斯の東部「ホラーサーン」の地方に赴き、更に南下して、今日の「バンデル・アバス」附近から「ホルムズ」の海峡を渡つて、一時、亞剌比亞の「オマーン」附近の島嶼に寄寓し、更に印度に向ひ、孟買の北方九十英里の所にある「サンジャン」(Sanjan)に上陸し、それから始めて、拜火教の殿堂を孟買の北方二十英里の「ウドワダ」(Udwada)の地に造築したと云ふことである。

私は「エズド」の地に滯在した日數は僅か二日に過ぎなかつたが、世界最古の宗教で、基督教や、恐らく佛教よりも舊き起源を有する拜火教が、昔ながらの風俗習慣を異教徒の間に於いて恪守して居ることを眼前に見て、實に喜びに堪へなかつた。又、今日の波斯政府が「イスラム」教國の政府でありながら、政教の分離を目的として努力し、古代「イラーン」民族の文化を保存する上から、勉めて「セミチック」民族の文化と絶縁せんとしつゝあるのを見て、一は恐れ、一は喜ぶ次第である。かゝる事業は、一朝一夕に出來ることではなく、又、如何に統治者が、法律命令を、雨の如くに下したからと云つて、其の目的を達し得るものではない。とにかく、現王朝は三



月二十一日、卽ち、春分の日を歲首とする曆を採用して居るが、是は卽ち、拜火教徒の曆である。「フェルドウシィ」の「シャフナーメ」の言語を標準語とせんとして居る。是等は畢竟、「イラーン」國を薩珊王朝の波斯に還元せんとする國民運動と見ることが出來やうと思ふ。